

「から」の歴史、「にとつて」の歴史を考えよう。歴史学者の成田龍一さんが若者向けに書いた「戦後史入門」(河出文庫)でそう呼びかける。「から」や「にとつて」の前には地域や集団などに入る。中央の目線や中心からの思考とは異なる見方にふれる意義を説く。

▼代表例に挙げるのが沖縄から見た歴史だ。地元で作られた子供用教材を開き年表を見ると、

まず大戦末期の沖縄戦の記述が詳しい。1945年から戦後期が始まるが、それも72年を境に「米軍支配期」と「現代沖縄」に分かれる。例えば沖縄以外で育った若者のうち、どれくらいの人がこうした感覚を共にしているだろう。

▼おとといの23日、沖縄は梅雨明け宣言とともに「慰霊の日」を迎えた。「戦争は起こらないでほしい。もうあんな思いをする人がいてはいけない」。戦没者名を刻んだ「平和の礎」のある摩文仁の丘で、83歳の女性がそう語つたと本紙記事が伝える。戦後73年目を迎え、体験を語れる人たちが減る中、記憶をどう伝えるか。

▼戦争は国民生活に傷を残す。しかしその傷ゆえに人は世代を超えて未来を描こうとし、その営みの中で記憶は生き続ける。社会学者・橋本明子さんの近著「日本の長い戦後」(みすず書房)の結びの言葉だ。遠からず東京なども梅雨が明け、8月に向けて慰霊の季節を迎える。未だために過去を知る営みを大切にしたい。